

草刈貝塚出土叉状腰飾



202号住居跡人骨・叉状腰飾出土状況

草刈貝塚出土の叉状腰飾について

西川 博 孝

ここに紹介する2点の鹿角製叉状腰飾は、千葉県市原市草刈に所在する草刈貝塚から出土したもので、すでに報告済のものである。(千葉県文化財センター 1986)

現在、当センター本部の資料展示室に展示されており、たまたま機会を得て詳しく観察したところ、二三の興味深い点が認められたので、ここに再報告することとした。

1. 出土状況及び所属時期

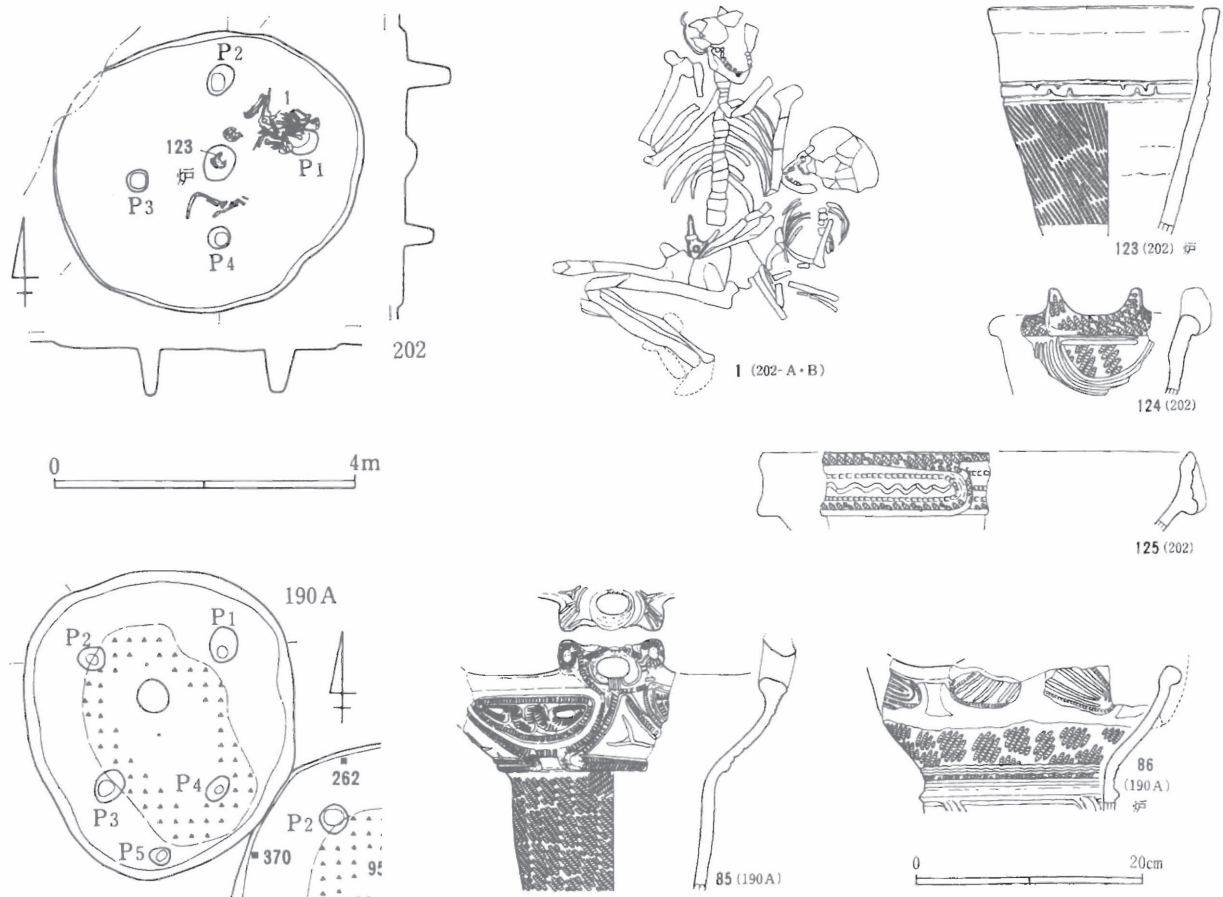
第2図1は報告書によると、202号住居跡の床面上から発見されたA人骨に伴って出土した。(図版6・第1図) 202A人骨は仰臥屈葬で、顔を軽く左に曲げていた。右腕は肘を脇腹につけ、上腕を胸に当てる状態に置き、左腕はやはり肘を脇腹につけ、上腕は腹部の方

向に伸びていた。下肢は密着し、膝を右側に倒す状態であった。腰飾は図版6下に見るとおり、表面を表にし、鉤部を上方に叉状部を下方にした状態で、腰椎上やや右側骨盤寄りから出土している。

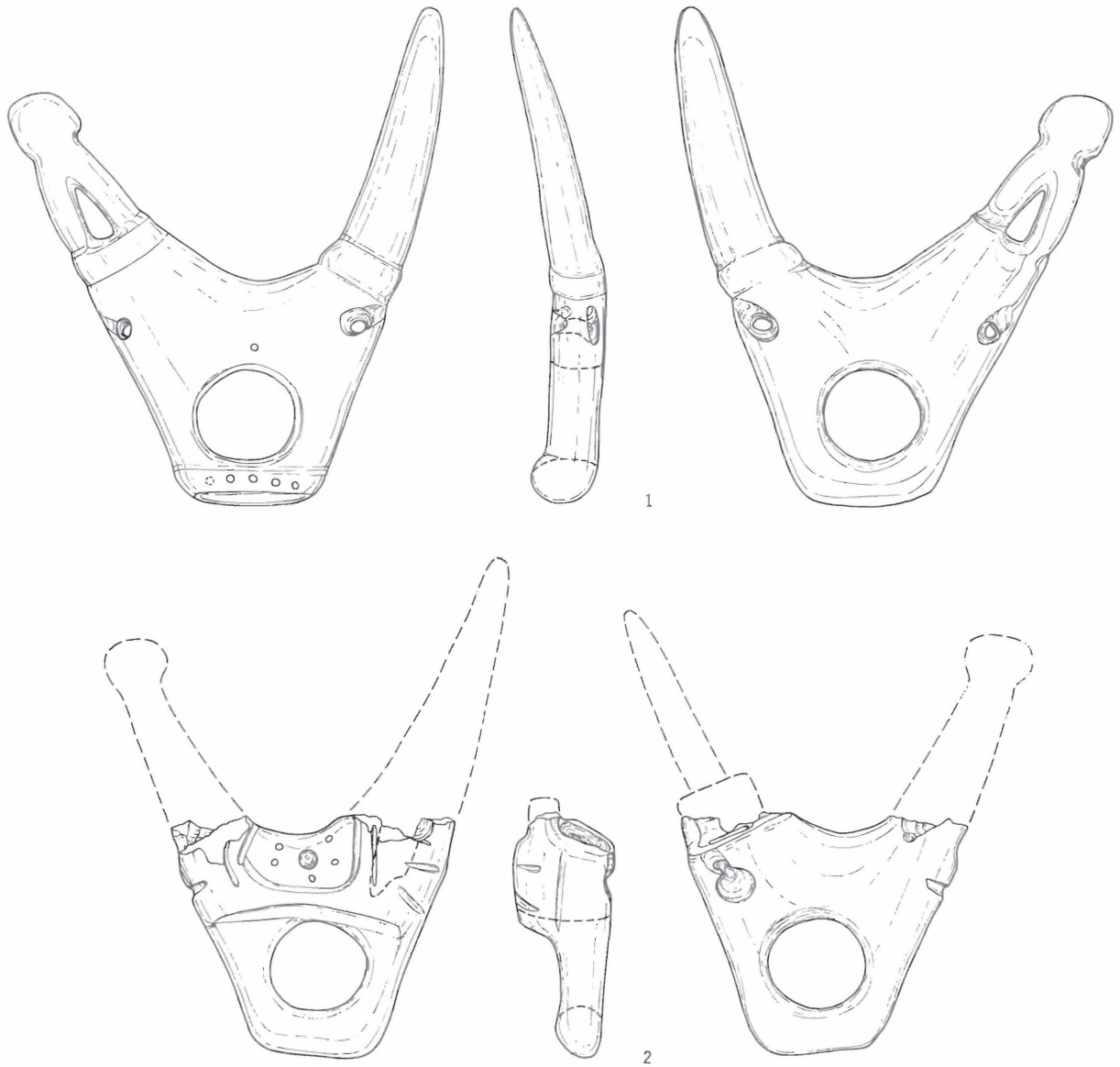
なお、202B人骨がA人骨に添うように発見されているが、その下肢骨はほとんど残っておらず、したがって、この腰飾がB人骨に伴う可能性はほとんどない。

所属時期は炉体土器及び覆土中出土土器の大部分が、勝坂式末期・阿玉台式末期・いわゆる中峠式であり、当該期のものとみて差し支えないものと考えられる。

202A人骨は、鑑定によれば成人男子とされ、「下顎骨は強大であり」、「大腿骨における粗線も強大で、



第1図 草刈貝塚叉状腰飾出土住居跡・着装人骨・住居跡出土土器



第2図 草刈貝塚出土叉状腰飾 (S=2/3)

著しい柱状性を呈している、そのたくましさが印象的である。上顎は残っていないが、下顎骨の歯の残存状況から抜歯は認められない。

第2図2は190A号住居跡混土貝層中から出土したものである。(第1図)覆土中から散乱状態で190A人骨が出土している。成人男性?と鑑定されているが、本遺物との関係は不明である。炉体土器及び覆土中から出土した土器は、阿玉台式の古手と思われる破片を少量含むが、多くは阿玉台式末期・いわゆる中峠式のものである。したがって、本資料は第2図1とほぼ同時期の所産と考えられる。なお、2点の腰飾が出土した住居跡は直線距離にして約50m離れている。

2. 形状

第2図1 鹿角の前枝を含む叉状部を切断し、これを縦にほぼ半截したものを加工して作られている。図左に示した右側鉤状部が前枝、左側が主幹、下部が角座方向と考えられる。出土状態及び後述する使用痕から、本来鉤状部を上にして着装したものと判断した。また、図左が出土状態及び紋様が施される点から表面、図右が鹿角の海綿質が現れている点及び使用痕から裏と判断した。

叉状部には下方にやや偏って大形の透し孔がほぼ垂直にあけられており、その上方には径2mmの小盲孔が一つの紋様として施されている。基部には両側面にかけて隆帯が作出され、隆帯上には同様の小盲孔が4個残っている。本来5個あった可能性があるが、破損のため不明である。左右鉤状部の付け根には、それぞれ

平低な隆帯が作出されている。右側鉤状部は先端に向かって次第に細くなる単純な形状である。一方、左側鉤状部には三角形の透し孔があげられており、その先端は丸みを持つ。先端の基部は裏面から削りこまれて、円頭状を強調している。

左右鉤状部の隆帯下には、着装するための紐通し孔があげられている。注意すべきなのは、この左右の孔とも斜め上方へ紐擦れ痕が顕著に残っている点である。また、裏面の状態を見ると、尖頭状となる鉤状部の基部に作出された隆帯は側面のみが明瞭であり、裏面部分は着装時に体に密着していたため、すり減ってしまったものと考えられる。周辺部が滑沢を帯びている点もこのことの傍証となる。もう一方の円頭状鉤部の裏面は、表面の隆帯に当たる部分に削り込みが認められる。裏面の左右紐通し孔には表面同様斜め上方に向かって紐擦れ痕が顕著に残る。

側面観は、円頭状鉤部はほとんど反りが認められないが、尖頭状鉤部は表面側に向かって強く反っている。第2図2 左右とも鉤状部が欠損している。第2図1と比較すると紋様は異なるが、大きさ・形状がきわめて近いことがわかる。紋様が施される点及び擦れの状態から図左側が表面、右側が裏面で、第2図1と同様に鉤状部を上にして着装されたものと判断した。第2図1と同じく鹿角の叉状部付近を切断して作られているが、全体を縦に半截していない。このため基部を薄くする必要から、表のこの部分のみを削り取っている。叉状部基部側が角座方向で、鉤状部は表から見て左側が細いことから前枝、右側が主幹と思われる。

基部には第2図1と同様に大形の透し孔があげられる。表面の叉状部にはU字状の沈線が一部二重となって刻まれ、その中を径4mmの盲孔を中心に5個の小盲孔が施されている。この小盲孔は穿孔方法、大きさとも第2図1のものときわめてよく似ている。なお、側面にも短い沈線が縦横二方向に刻まれているが、その紋様は左右で異なる。裏面には紋様が刻まれていない。大形の透し孔の左右端部から両鉤状部に向かって、本来の鹿角の形状により隆起しているが、この隆起部が滑沢をなしている。着装時常に身体に接触していたためと思われる。

表から見て左側鉤状部は紐通し孔部分で折損しており、右側鉤状部は裏側半分が基部に人為的な切断面が残る一方、表側半分はさらに上方に突出しながら折損している。なお、右側鉤状部は図上方から大きくえぐり込まれた盲孔があげられている。左側鉤状部の紐通

し孔は、折損部にかかっているため不明瞭であるが、左側面と裏面から穿孔されている。細かく見るとこの紐通し孔は、2回あげられているのがわかる。また、右側鉤状部の紐通し孔は、表面側は1回の穿孔しか認められないが、裏面側はやや内側上方に向かって大形の孔が認められ、さらに小形の孔が鉤状部基部切断面に認められる小孔と対応してあげられている。なお、この小孔から外側上方に向かって紐擦れ痕が残っている。以上のように、第2図2の腰飾は紐通し孔が左右とも2回あげられていることから、鉤状部の折損により修復が行われたことがわかる。表から見て右側鉤状部が折損したため裏側半面を基部で切断し、表側半面を裏面よりも突出させて加工し、上方から大きく盲孔を穿って木など腐食質の鉤状部を差し込んだものと考えられる。このため、紐通し孔はやむなく小形にしてあげ替え、重量のバランスをとるためにもう一方の紐通し孔もあげ直したのであろう。図2左側実測図の復元部分は当初の形態、右側実測図の復元部分は修復後の形態をそれぞれ予想したものである。

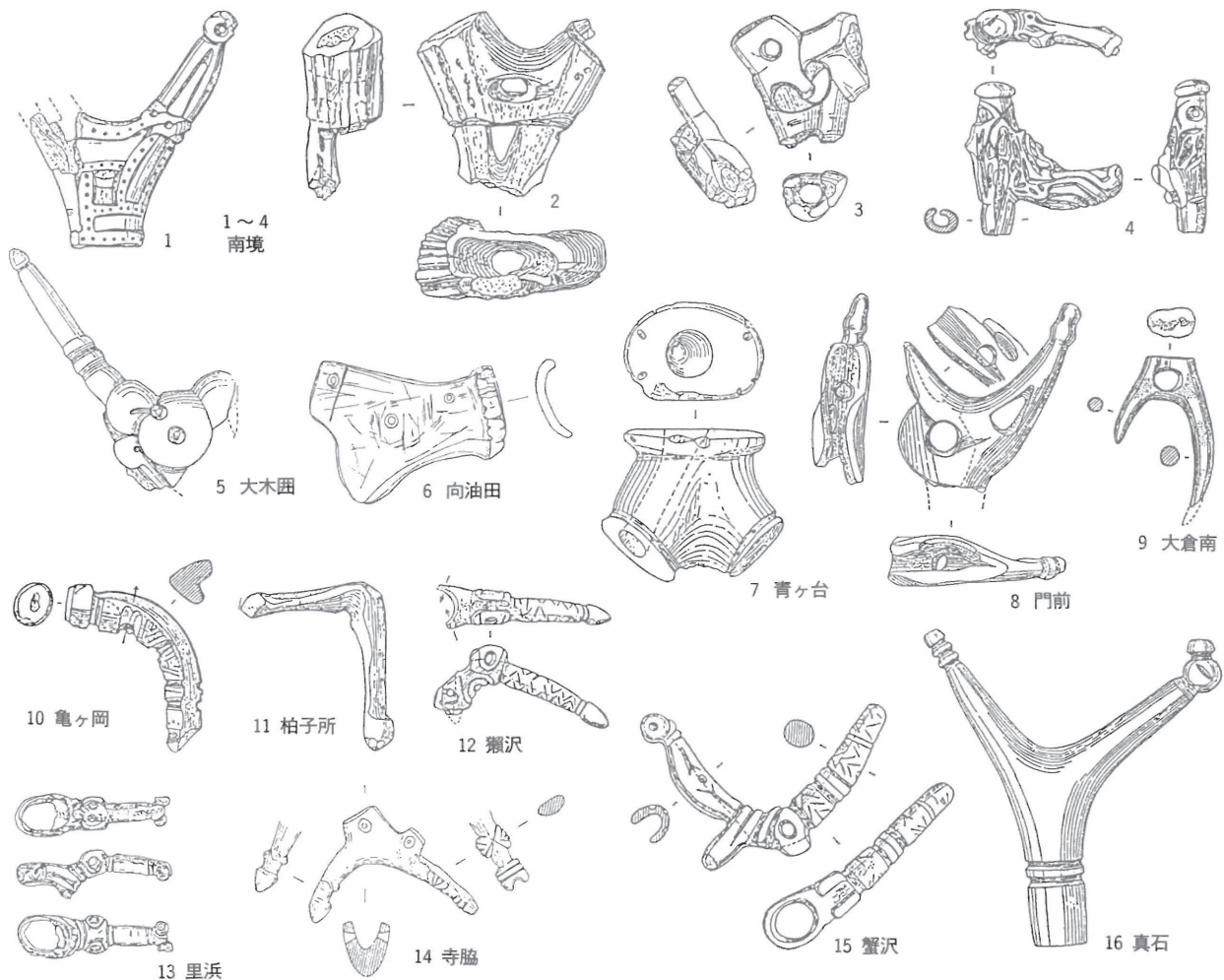
3. 考察

(1)生前・常時着装

これまでの観察から、本2例は紐擦れ或使用痕が顕著に認められ、しかも修復も行われていることから、着装が生前に行われ、しかも常時身に着けられていたことが明瞭である。腰飾の使用痕跡については、古く小金井良精が手擦れていること(小金井 1923)を、清野謙次が「紐通し穴の一侧が往往非常に磨かれて居る」こと(清野 1924)をそれぞれ指摘しており、本2例との共通性が指摘できる。

(2)着装者

本2例中1例が成人男性が着装していたことについては、これも古く清野によって津雲貝塚の腰飾が男性に限られていた(清野 同前)と指摘されて以来、女性着装の発見はきわめて少なく、春成秀爾によれば全国で8例にとどまり、男性腰飾と同型のものは1例(吉胡92号人骨・第5図24)にすぎず、他は形態が異なるという(春成 1980)。着装年齢については、本例は単に成人とのみ記されており、詳細は不明であるが、やはり春成によれば壮年末から熟年初の着装者が多く、年齢とも深い関係があることを指摘している(春成 同前)。本例を着装していた202A人骨は骨格の「たくましさ」が強調されており、年齢に加えて着装者の身体的または能力的優位性と関連していた可能性も考えられる。



第3図 関東北の叉状腰飾 (S=1/3) (1~6中期、7~9後期、10~16晩期)
原図は(金子ほか 1986)による

(3) 装着部位

202A人骨に伴った腰飾は腰椎のやや右側骨盤寄りから出土したことから、装着時は下腹部右側、すなわち「臍」右下に佩用していたと考えられる。清野は「へその近所の下腹部前腹壁正中線近く」に装着していたもの(清野 同前)としており、大差のない位置である。本2例は紐擦れ痕跡から、左右の紐通し孔に径3mm~5mm程度の紐を別々に通し、やや釣り下げ気味にして腰の後部すなわち臀部上方で縛って佩用したものと思われる。なお、樋口清之は津雲53号人骨の薦骨後部出土例(第6図5)から「相当広範囲の可動性を以て着用されたものらしく、決して一ヶ所に固定されたものではない」ことを指摘している(樋口1955)。

(4) 所属時期

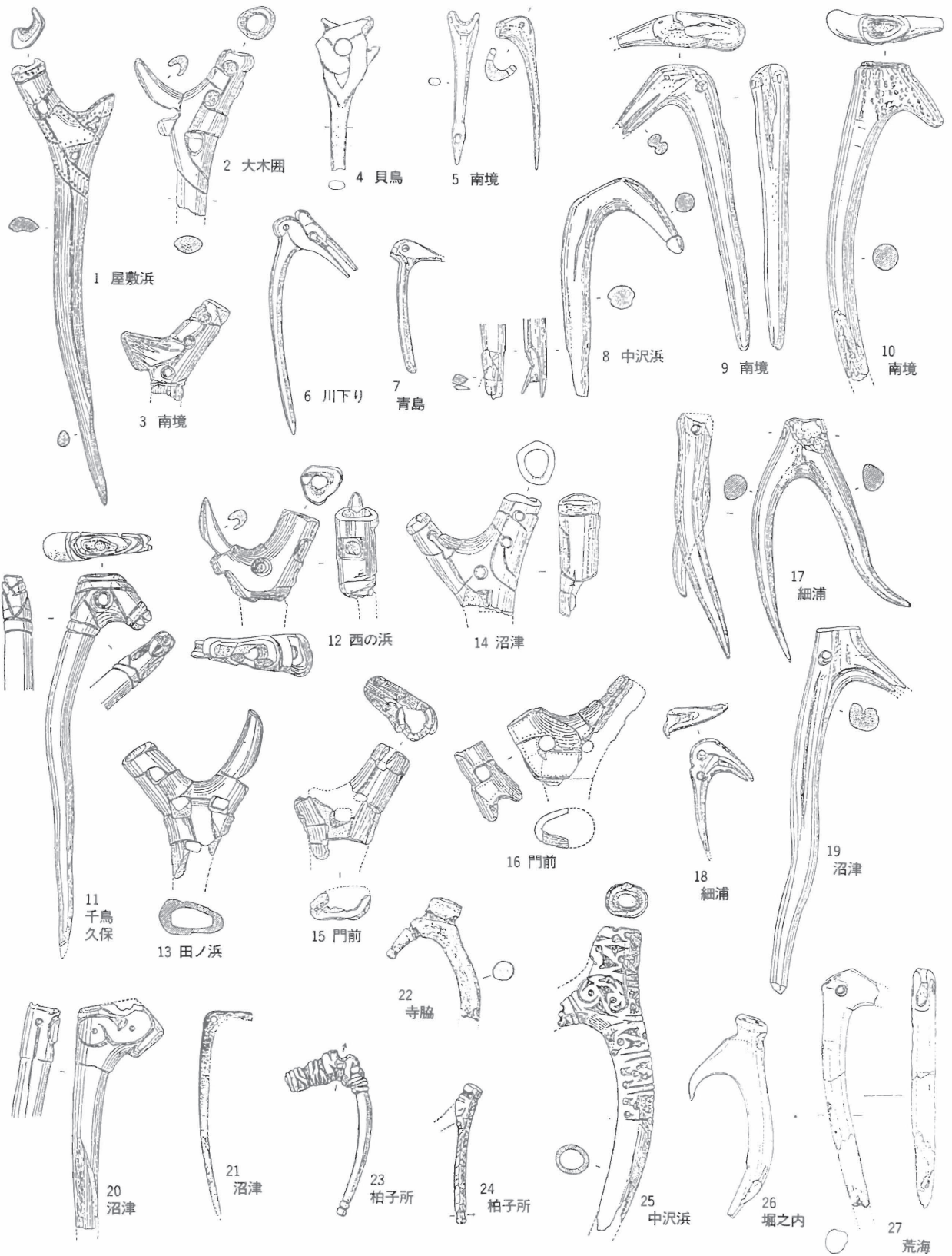
本2例は阿玉台式末・いわゆる中峠式段階のものである。叉状腰飾は長叉状角器²⁾を含め、中期に始まり、後・晩期から弥生時代まで続いている。その初源は明確でなく、勝坂期が今のところ最古段階と思われる³⁾。千鳥久保貝塚の男性人骨に伴った例(第4図11)は、周辺から勝坂式が出土したとされている(菊地1957)。姥山貝塚でも中期土器に伴って2点が出土

ていると言われる(グロート・篠遠 1952、大山・甲野 1931)が、現在未見である。また、形態は異なるが向油田貝塚の男性人骨下顎付近から出土した例(第3図6)は、近くから阿玉台式の大破片が出土している(西村 1984)。

東北ではやや不確実な例を含めて、南境(第3図1)・貝島(第4図4)・青島(同図7)・川下り響(同図6)・屋敷浜の各例が中期に属する。中でも出土層位の明らかな貝島例は大木8~10式期(草間1971)、南境例は大木10式期(宮城県教委 1969)である。また、大塚和義は川下り・青島例を大木9~10式期に相当するとしている。(大塚 1967)したがって、本2例は今のところ最古の段階に近い例といえよう。これら諸例を見る限り、叉状腰飾は長叉状角器を含め、よくいわれるように革状のものを巻つけた表現など、中期それも中葉期に至って、完成された形態で出現したようにみえる。

(5) 形態

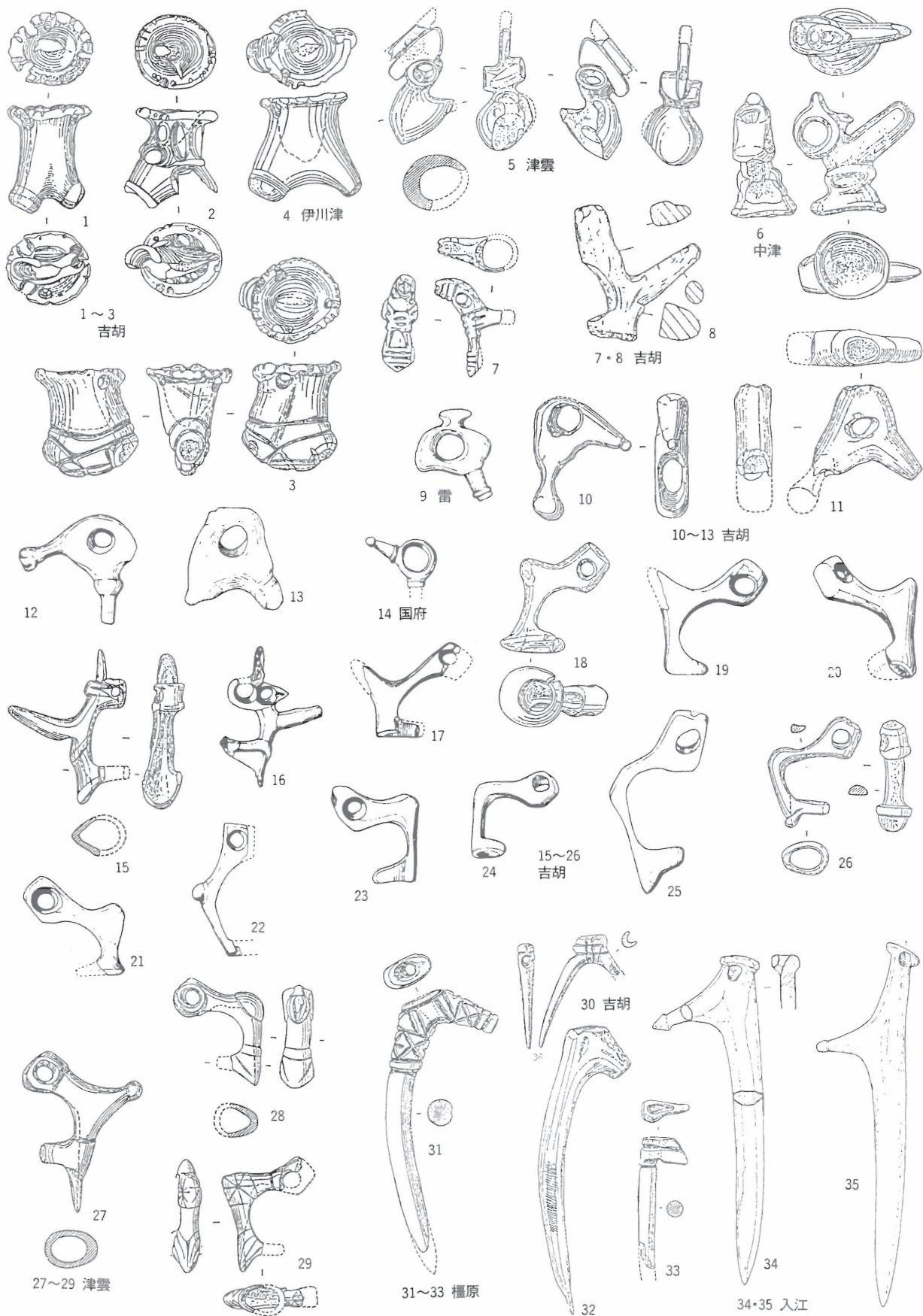
202A人骨の腰飾に最も近いのは、南境例(第3図1)であろう。円頭状の先端部及びその下に見られる三角形の窓状の透し穴は、きわめてよく似ている。た



第4図 関東北の長又状角器 (S=1/4) (1~11 中期、12~21? 後期、22? ~27 晩期)
 原図は (金子ほか 1986) による

だ、小孔が並ぶ隆帯表現は南境例の方がより複雑で、基部の透し穴表現も異なっている。また、これより隆帯表現が乏しいものに屋敷浜例 (土肥 1997) がある。

しかし、この例は又状部が三叉になっており、先端の円頭状表現はない。草刈貝塚の他の1例は南境例 (第3図2) とは細部が異なるが、基部が段状に半截され



第5図 西日本の又状腰飾 (S=1/3)・長又状角器 (S=1/4) (1~35 後晩期、34・35 弥生)
 原図は1~8、10、11、15、18、26~35は(金子ほか 1986)、
 9、12~14、16、17、19~25は(春成 1980)による

る点や、鉤部が差し込み式になる点は共通している。

後期例では大倉南貝塚例（同図9）に基部に円形の透し穴が施されたものがある。東北後期例では全体の形状がやや異なるが、門前貝塚に円頭状表現のある鉤部とその下に三角形の透し穴が施されたものがある。

（同図8）全体に又状腰飾及び長又状角器は、関東での出土例は少なく、文様表現も東北に比べて関東例はやや劣るようであるが、両地域の形態的類似性ははっきり指摘できるであろう。

（6）又状腰飾の機能

又状腰飾や長又状角器の尖頭状鉤部について、春成は金関丈夫による魂の拘禁具説（金関 1975）を採用している（春成 同前）が、草刈の1例を含めてしばしば認められる円頭状表現は何を表すものであろうか。樋口は国府例（第5図14）に見られる突起に対して「Phallus状を呈して居り、（中略）あるいは一種のsexual magicの意義を持って造られたものであるかもしれない。」としている。類似する例をあげると、南境例（第3図1）や晩期蟹沢例（同図15）は、草刈と同じく円形に近いものであるが、大木（同図5）、門前（同図8）、寺脇（同図14）、瀬沢（同図12）、亀ヶ岡（同図10）、吉胡（第5図10）、入江（同図34・35）などの諸例は、くびれをもった先端が紡錘状をなしている。また、真石（第3図16）、櫃原（第5図31）などの諸例は、刻線が1本～3本刻まれており、これも類似の表現であろう。さらに、樋口が三角形腰飾と分類した（樋口 同前）津雲の諸例のうち、C型（有突起形）の一部（第5図27）はこれが表現されたものであり、B型（隆起形）（同図28・29、吉胡の同図21・22）はこれらのバリエーションであることが理解されよう。したがって、又状腰飾の着用者がほとんど男性に限られることを考えあわせれば、その機能は石棒とある点で共通した意味合いが付加されていたと思われるのである。石棒は豊饒を祈る祭祀に使われたとされているが、又状腰飾は個人の所有物であることから、狩猟に際しての護符的機能や豊饒祈願の念が込められていたものと思われる。ただ、すべての又状腰飾にこの表現が認められる訳ではない。菊地義次が長又状角器についてかつて指摘したように、これらは着装者が限定されることから、集落の呪術的専門家ないしはリーダー的権威付けのシンボルとしての機能が本質であったと思われる。

又状腰飾や長又状角器の機能について以上のような推定が許されるならば、集落規模が飛躍的に大きな

る中期中葉に発生したことは理由のあることなのであろう。

注1 当センター研究紀要19で再分析中である。

2 指揮杖・鳥嘴状角器などとも呼称されるが、ここでは（金子・忍沢 1986）に従った。

3 西村正衛は茅山貝塚で長又状角器を発見したという。（西村 1964）

4 Phallus表現は山の神信仰との関係が指摘されよう。（国分 1992・ナウマン 1994）

引用文献

- 小金井良精 1923「日本石器時代人の埋葬状態」『人類学雑誌』38-1
- 清野謙次 1924「発掘余論」『日本人の研究』岡書院
- 大山柏・甲野勇 1931「リサン師と姥山」『史前学雑誌』3-1
- ジェラード＝グロート・篠遠喜彦 1952『姥山貝塚』日本考古学研究所
- 樋口清之 1955「腰飾考」『國學院雑誌』56-2
- 菊地義次 1957「千鳥久保貝塚発見の骨角器を着装せる人骨に就て」『古代』25・26
- 西村正衛 1964「骨角器と貝器」『日本原始美術』2 講談社
- 大塚和義 1967「縄文時代の葬制」『史苑』27-3
- 宮城県教育委員会 1969「埋蔵文化財緊急調査概報一南境貝塚」『宮城県文化財調査報告書』20
- 草間俊一 1971「貝鳥貝塚調査報告（第3次）」『貝鳥貝塚』
- 金関丈夫 1975「魂の色ーまが玉の起り」『発掘から推理する』朝日新聞社
- 春成秀爾 1980「縄文晩期の埋葬原理」『小田原考古学研究会会報』9
- 西村正衛 1984「千葉県香取郡山田町向油田貝塚」『先史時代における利根川下流域の研究』（財）千葉県文化財センター 1986『千原台ニュータウンIII草刈遺跡（B区）』
- 金子浩昌・忍沢成視 1986『骨角器の研究縄文篇Ⅰ・Ⅱ』慶友社
- 国分直一 1992『日本文化の古層』第一書房
- ネリー＝ナウマン（訳 野村伸一・桧枝陽一郎）1994『山の神』言叢社
- 土肥孝 1997「縄文時代の装身具」『日本の美術』369